

# ※第19回は、変わった趣向で

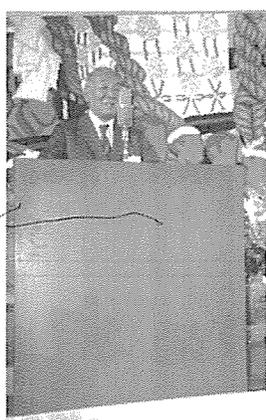
—東京鶴翔同窓会第19回報告 青柳 恵一(51回)

平成元年第19回東京鶴翔同窓会は、前年度の母校創立百周年に当たる第18回同窓会の盛大な挙行のあとを以て、6月24日に一風変わった形で開催されました。

激動の昭和が終わる年改まった平成元年、母校は次なる二百年に向けてスタートした百一年目の年、当番年次は一組の51、61、71回生が中心になり、首相談の結果、何事も一づくめだから何か変わった趣向で...と言うことになりました。

では、どんな具合に風変わりな型破りだったかをご説明しましょう。

先ず第一は、毎年設けられるテーマを省略し些か詭弁的だが「無テーマ」をテーマと言うことにしました。



当日は梅雨前線通過のため朝から豪雨、出足が心配されましたが、遠来の酒井忠明鶴翔同窓会長(43回)始め来賓各位や、この日を待たびた二百三十名の同窓諸兄弟姉が続々と到着、定刻より稍遅れましたが、予定に従って進められました。

プログラム第一部の総会は「ときわホール」で実行準備委員長の前が開会宣言挨拶し、そのあと直ちにアトラクションに移りました。

はらわたに染み渡る津軽三味線がスタート。続いて梅津正吉前会長(34回)と相馬龍夫新会長(42回)の交代セレモニー及び酒

井忠明 本部長  
長より  
の記念  
品贈呈  
式が行

われしました。(右上の写真は引退表明される梅津会長で、バックは横帳に刺繍された三社祭みこしの絵柄です)

そのあと、再び妖艶な舞踊に戻って第一部を終了。来賓のご祝辞は会報に既掲載とすることでご省略させて頂いた事が第三の型破りです。

プログラム第二部は全員三階大広間に移動し、卒業年次毎にテーブルを囲みました。来賓の佐藤公志鶴岡市助役(51回)の音頭で乾杯のあと懇親会となりました。

久し振りに再会の旧友達は、あすは休みとの気楽さも手伝っ

## 平成元年東京鶴翔同窓会収支決算書 (平成元年1月1日～元年12月31日)

①一般会計		収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額	科目	金額
前期より繰越	501,289	総会費	953,748	総会費	843,167
年会費	861,000	事務費	843,167	(印刷費)	(522,005)
年会費	583,570	(印刷費)	(522,005)	(通信費)	(320,287)
年告	1,410,000	(通信費)	(320,287)	(文具費)	( 875)
雑収	121,800	(文具費)	( 875)	会議費	287,964
(祝金)	(115,000)	会議費	287,964	その他	203,782
(その他)	( 6,800)	その他	203,782	(祝金)	( 80,000)
		(祝金)	( 80,000)	(その他)	(123,782)
		(その他)	(123,782)	特別積立金へ	800,000
		特別積立金へ	800,000	次期繰越金	388,998
		次期繰越金	388,998		
合計	3,477,659	合計	3,477,659		

②特別会計積立金(名簿作成等積立金)		収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額	科目	金額
前期より繰越	1,632,467	次期繰越金	2,475,087	次期繰越金	2,475,087
一般会計より	800,000	(定期預金)	(2,408,397)	(定期預金)	(2,408,397)
定期預金利息	42,466	(普通預金)	( 66,690)	(普通預金)	( 66,690)
普通預金利息	154				
合計	2,475,087	合計	2,475,087		

平成2年1月27日  
監査の結果上記の通り間違いありません。  
会計監査 大澤 栄造



題字は初代会長 故田舎八郎氏筆  
**第20号**  
発行所 東京鶴翔同窓会  
東京都千代田区内神田2-16-9(〒101)  
庄内銀行  
東京支店内  
TEL.03-256-8911  
**故郷と手を結ぶ**  
印刷所  
株式会社 一芳タイプ  
代表取締役 長谷川勝一(59回)  
新宿区筑土八幡町31番地  
第一芳栄ビル  
TEL 03-235-2691(代)

# 信ずる道を歩もうヨ

—新 東京鶴翔同窓会長 相馬龍夫氏に聞く—



(銀座6丁目、相馬さんのお店の近くの喫茶店にて)

身長約180cm。体重は病後70kgを割ったと言われる相馬さんではあるが、お顔はツヤツヤとても74歳とは見えな

町に引越しましたので、小学校は「朝陽第四」です。  
・ たった一つの親孝行と応援団長  
— 父上(旧鶴中教頭の相馬繁治先生)の關係で、校内の官舎に住まれたと前會長の梅津正吉さんにかがいました。ええ、それは親父が教頭になったのが小学四年の時からです。その当時、親父は授業の鐘が鳴る頃に家を出れば間に合

は時代もお袋ものんきなもので、一とこで、相馬さんは中学で応援団長をなされたそう。はい。その前に一言。私ネ最初の入学試験で落ちて高等小学校に行つたのです。何しろ勉強なんか、全くしてなかつた。

かつたですよ。朝礼で校長さんの話が終ると、私が「これから選手を停車場まで見送りに行く。マワレー・ミギノ」靴の音高らかに行進です。弓道や野球・テニス・サッカーなんかも強かったですよ。数奇な戦争体験—満州から台湾まで—終戦の時は、どこにおられましたか?

とこで父の所へ入学試験が近づくと、受験生の親が「よろしく、よろしく」と頼みに来るんですね。受かると、父の力があつたと思うでしょう。ところがそうじゃない。親父は何にもしないの。受けたい子ができたんですよ、あれは。ある時、一人の親が血相変えてやって来ました。息子が不合格になったが、いったいどうしてくれる!と云うのです。玄関で応待したお袋が、その親の顔をじつと見すえて、私のところの息子も落ちました。その人は、黙って頭を下げて帰ったそうです。

東京鶴翔同窓会は、皆さんみんなの力でやっていきましょう。私が生きて帰れたのも自分の信念を通したからだと思ひます。曲げられるようなものは信念ではありません。自分を大事に、独断や偏屈歩んでいきましよう。— どうも、ありがとうございました。

※ことし、第20回東京鶴翔同窓会は、6月22日(金)です。くわしくは、別紙号外ご参照!



# 祝 第20回 東京鷺翔同窓会

キャンプ用ボードも  
ここまで進化!

貼替自由、フィルムではさむだけ  
軽くて便利なプレゼンテーション用ボード



有名画材店・東急ハンズで発売中  
ポスターパネル・アルミフレーム専門  
アートスペース 代表取締役 小花吉彦(64回)  
〒151 東京都渋谷区上原3-25-9 TEL03-469-8211 FAX03-465-3501

総合建設コンサルタント 設計業・施工管理業・建設業・不動産業  
誠実・信用 これがわが社のモットーです  
(社)全国宅地取引業保証協会会員  
東京都不動産協同組合員  
**アイ・エヌ・シー技術開発株式会社**

代表取締役(60回) 野沢良治 電話(03)983-3136(代) FAX(03)985-0016  
〒171 東京都豊島区目白2-5-23 第一平ビル

スキースクール 蔵王スキー場に開校して21年目  
社団法人 日本職業スキー教師協会 公認校  
(有)ZAO フライツァイト シーシュレ  
校長 土岐良次 (52回卒)  
(西ドイツスキー教師連盟名誉教師)

村田敏総合法律事務所  
弁護士 村田 敏 (慶大卒・77回)  
〈取扱業務〉  
民事事件(借地・借家・相続・離婚・相続関係・交通事故等)刑事・少年事件(保釈・人身保護・家事審判等)  
涉外事件(国籍・帰化・在留等)その他、一般の法律相談に応じます。  
〒160 東京都新宿区新宿1-30-6 御苑イキビル3階  
☎(03)352-5941(代)

坂本税務会計事務所  
税理士 坂元 鐵平 (62回)  
事務所 神奈川県座間市相武台3丁目4721番地13  
三協相武台駅前ハイツ207号  
TEL 0462-53-6049 FAX 0462-56-7594  
自宅 神奈川県座間市広野台1丁目5115番地5  
TEL 0462-55-2051

東豊産業株式会社  
代表取締役 富谷友太郎 (52回)  
〒110 東京都台東区東上野2丁目18-7  
☎03-832-3288

興榮工業株式会社  
代表取締役社長 野澤秀二 (52回卒)  
本社 〒114 東京都北区昭和町3-1-2  
TEL 03-800-5720 (代表)  
鶴岡工場 〒997 山形県鶴岡市宝田1-17-46  
TEL 0235-24-3357(代表)

山中税務会計事務所 事業承継対策  
税理士 山中 昊吉 (61回)  
東京都港区芝5-20-7-303  
☎(03)798-5895.2375 FAX798-5896

株式会社 西和工務店  
代表取締役 西脇 啓治 (52回)  
〒160 東京都新宿区荒木町13番地4  
住友建設ビル内  
電話 03-353-9758  
FAX 03-351-0128

宇部興産株式会社  
取締役資源建材事業部長  
加藤 五郎 (57回)  
東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル  
TEL (03) 505-9371

"世界と日本の明日"がこの二冊に! (絶賛発売中)  
**全予測 90年代の日本 90年代の世界**  
牧野 昇/三菱総合研究所著 ★各1500円(税込み)¥310  
ダイヤモンド社 〒100東京都千代田区麹町1-4-2 ☎03(504)6515 振替東京9-25976  
「代表取締役社長 川島 謙 (61回)」

祝 総会  
加藤 憲作 (60回)  
株式会社 加藤企画室

## 第二世紀スタートの母校



県立鶴岡南高等学校校長 金森 武

東京鷺翔同窓会員の皆様には、益々御健勝で各界において御活躍のことと拝察し、心からお慶び申し上げます。また母校のため日頃絶大なご支援をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

母校では、昨年七月一日に創立百一周年記念式典を挙行いたしました。第二世紀スタート一周年を慶賀いたしましたところであり、教職員・生徒一同力を合わせて、百年の間に培われてきた自主・剛健・叡智の鷺翔精神を継承しながら、二世紀の礎石となる新しい伝統の創造に、その一翼を担う者として努力することをお願いいたします。

さて、学校におきましては、

グラウンドの全面改修工事が昨年十月より始められ、三月末に完成いたしました。

周りをフェンスで囲み、水はけがよく、広々としたグラウンドになりました。サッカー、野球部員の元気な練習風景が御覧なれると思います。また、中庭の造成工事も生徒の体験学習により、芝草を張り、いこの広場として整備いたしました。

平成元年度の部活動につきましては、アーチェリー、山岳部が全国大会に出場いたしました。音楽部、吹研(金管)は東北大会に出場いたしました。

秋の県高校総体では、アーチェリー団体・個人優勝、バレーボール(男)三位、弓道(女)個人優勝、水泳(女)個人メドレー優

勝、陸上(男)八百米二位など活躍が目立ちました。  
平成二年春の全国高校選抜バレーボール大会県予選会では、惜しくも三位にとどまり、全国大会に駒をすめることができず残念でなりません。新年度に期待したいと思っております。

進学状況では、御承知のように大学入試制度は猫の目の如く変わり、平成二年度はセンター

試験に改まり、従来の大学入試がガラリと変わって、激しさが一段と増してきました。

こうした変化に遅れをとらぬよう、学校では指導・対応に日夜奮闘いたしているところであります。きっと平成二年度入試も元年度の先輩に負けない立派な成績をあげてくれるものと思っております。

すべての大学合格が判明するのは三月末になりますが、これまで発表になりました国公立大

前期日程分の主なところをあげてみると、京都市大、東工大、東工大一、東北大一五、千葉大一、筑波大二等でございます。

終わりに、東京鷺翔同窓会の一層の発展と皆様の御健康をお祈りし、また母校の今後のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

(平成二年三月十一日記)

一鶴岡南高文化祭での生徒諸君一



一鶴岡南校全景・創立100周年記念一



68回	67回	66回	65回	64回	63回
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴谷 正	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷川 正	富樫 秀	黒井 秀
鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依	鈴木 依
渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山	渡辺 山
波部 斎藤	渡辺 山	宮本 山	長谷		









「元気です」

早坂 敬二郎

(昭和40年卒・72回)

春霞が天と地の境をなくし、幽邃な景色が果てしなく広がっている庄内平野。私は、母狩山(七五一m)の雪の山頂にいる。そんな「朧の世界」に浮遊する私の脳裏に冠雪だけがポカリと浮かぶ。

東にお腕をふせたような月山(一九八〇m)、北に台形の鳥海山(二二二六m)。そんな山の世界を知ったのは、もう30年近い昔になる。その後、ヒマラヤをはじめ、アンデス、アフリカの山々など世界の山に登り、今こうして郷里の山に思いを馳せている。

色々なことがあった。楽しいことより苦しいことの方が多かったような気がする。昨年夏、パキスタン・ナンガ

バルバット(八、一二五m)で、長年山で苦楽をともにした最も親しい友を目の前で失なった。それから半年もたたない昨年の暮、白馬岳(二、九三二m)で最も信頼していた友が行方不明になり、今も捜索が続いている。悲しい出来事である。そんな時、フツと郷里の山を思うことがある。穏かな、母の胎内にいるような身も心も開放される感覚。先祖帰り、故里回想。

故里の山から始まり、故里の山に帰える。私の山登りは、ちょうどそんな気がする。明日から学生の春山合宿に参加する。北アルプス笠ヶ岳(二、八九七m) 南西尾根、3週間の予定だ。

母狩山と庄内平野のあの景色の中にもどるのは、まだとうぶん先になりそうだ。元気でやっています。(1990年3月10日)



荘内館と館生の生活

難波 敦

(昭和61年卒・93回)

現在の姿―山手線の閑静な住宅地である駒込。その小高い丘の上に荘内館はある。すぐ裏手

にある円勝寺と古い町並のためか、東京とは思えないような北区の一角。

現在、館生は34名。大部分は鶴岡南高卒等の荘内出身者である。

親子二代にわたって入館している館生も多い。

一ヶ月の費用は館費(光熱・水道費等) 舍費を含めて、なんと一万七、八千円。希望者には朝夕の食事もある。建物は外観は古いが内部は整っている。集会室、図書室はもとより、シャワー、洗濯機、さらにはワイプロヤコピー機までが館生の使用に借されている。

館生の生活は原則的には、館生の自主性と責任に委ねられており月に一回の緑蔭会(会合)で必要な事が討議される。全国的に学生寮はあまたあるだろうが、荘内館ほど恵まれた所は、そうざらにはないと思われる。

伝統―荘内館を語るうえで欠かせないのが、その伝統と諸先輩の活躍である。現在の我々館生が日々充実した生活を送れるのも、現監督の大川龍太郎先生はじめ、幾多の先輩のご好意の賜に他ならない。荘内館は初代監督の佐藤雄能先生の頃より数えて九十年余の

歴史を誇る。そしてその歴史と共に、多くの先輩「館友」のご活躍がある。

例えば、前東京鶴翔会長の梅津正吉先輩、前独協大学長の白旗信先生、前東京神学大学長の佐藤敏夫先生、文化勲賞受賞・国立がんセンター総長の杉村隆先生(鶴岡市名誉市民) 東京鶴翔会事務局長の中村信雄先輩、酒田市長の相馬大作先輩、少年ジャンプ編集長の後藤広喜先輩…このほか、枚挙にいとまがない。

我々館生には年に一度の館友会(OB会)で、それら諸先輩と真近かにお会いし、お話を聞きする特権である。ただ心配なのは我々が社会に出てから、館友会で後輩達に対して、誇れるような実績をあげることができかどうかだろうかということである。(中央大学法学部四年)

陶芸展のご案内

齋藤洋一氏(86回卒)の陶芸展が5月14日から26日まで、ギャラリーM(港区南青山5-10-8 電・5485-3231)で開催。作品はワインカップを中心に。即売もします。地下鉄「表参道」下車。前畑陶器2F 関西鶴翔同窓会推せん。

おもひろく だめになる本

●日本古代文字の謎を解く 相馬龍夫・著 漢字が日本に伝えられる以前は、文学がなかったというのが専門家の通説。ところがどうもそうではないらしい。ふとしたきっかけから謎解きが始まる。絵文字解説への挑戦、銅澤文字を読むあたりは推理小説を読むような興奮をおぼえる。(新人物往来社・価1200円)

市塵

藤沢周平・著 六代将軍に側近の間部詮房とともに、生類憐れみの令の廃止 外国貿易の改善など幕政改革に打ち込んだ人間、新井白石の生涯を描いた長編歴史小説、終章(五十)を読む終えるのが惜しい感じ。第40回芸術選奨受賞。(講談社・価1450円)

庄内の風土・人と文学

東山昭子・著 庄内の松尾芭蕉・庄内の人と文学・庄内の斎藤茂吉の三章よりなる。特に中章は、居ながらにして庄内の文学めぐりができる。写真や地図が多いのもいい。高山樗牛賞受賞。著者は鶴岡西高等学校の先生。(東北出版企画・価2500円)

生が担任だったので、図画の時間に誰か、セックスに関してのいたずら書きを描いた者がいました。すると、あのフグは「これは、お前の母親や姉を侮辱するもんだ」と、しんみりと論じたのです。これが忘れられませんね。

菅原 地主先生は、上京なさってから戦後「ストーン(包)」の絵を永年描き続けられまして、これがアメリカの何とかという人の目にとまって、交流が始まったのだそうですね。

斎藤 そう、その人がアメリカへ帰ってから、地主先生は英語の手紙が書けないので、美術部に昔いた丸谷才一さんが代筆なさったということも聞いています。

中村 私の場合も、やはりムネオチャにギッチャ、それに国語のマメタン(秋山佐忠先生) 体操の依田康郎先生、それにフグはなんか、忘れられない先生です。ただ、この先生はすごい先生だなあと思ったのは、一年生で歴史を教えたことだった。芳賀幸四郎先生。ほんとうに力のある先生というのは、生徒にもわかるんです。芳賀先生は、後に東京教育大学の教授になられた、日本史では有名な学者です。

司会 戦前と戦後では、生徒の考え方や風にも違いがあるのは当然で、想いの先生方の話でも、時代というものを考えさせられました。

ところで、教育とは時代によって当然変わっていくものと、変わっては困るものがあると思います。皆さんが生徒だったころの体験、あるいは親として子ども

を育てた経験等から、これからの教育に求めるもの―学校教育に限りませんが、そんな話に移らせていただきます。

・心を許す友人ができる高校

田中 昭和の初めには、親子の断絶とか、学校グライとかは考えられないことでした。中学生は大人でした。今は、何でもかんでも先生が悪いとする親がいるが、どうも先生に対する信頼というものが無くなったようですね。

菅原 現代は、価値観が多様化し、海図のない航海というか人生の進路が定めにくくなっているようですね。こうした中で経済的なゆとりが、親・先生・生徒の間に甘えの構造が目立ち、なれあいになっていくようですね。昔はあった良い意味のきびしさ、ケジメがなくなっているようで、私はそれが心配です。まあ鶴岡南校は、そんなことはないでしょうが…。

上野 いや、そうでもないよ。いつの時代でも、先生と生徒の間で何かが残らないという事は、俺は無いと思うよ。目立つ先生だけでなく、目立たない地味な、つまり名前を忘れてしまったような先生からも俺たちは育てられていると思うよ。これからは生涯教育というか、学校を出てからほんとうの自己教育が始まるという時代なんだから…。

石黒 それに関連しますが、私が先生に求めることと言えば、生徒に「なぜ?」ということを追及させる教師であってほしいのです。中学や高校では、そういう先生には出会いませんでした。大学に行

って、初めて出会いましたけれど…。それから学問の上でも、ここ迄はわかっていなくても、ここからは分らない…そういうことを言える先生。わかっていなくてもナンセンスです。

丸山 俺は、さっきも言いましたが、いい生徒でなかったから、いい先生に当たらなかったようなことを言いました。が、南校に当たった―入学して卒業したことを誇りに思うし、ありがたいと思っ

ています。というのは、いい友達を南校のおかげでたくさん持ったから…。これからは、南校を出たことを誇りに思うでしょう。おそらく一生…。

池田 今、丸山君が言ったように高校時代に遊んだ友人というのは、思い出もあるし心も通じますね。今の教育というのは、早くできる、早くわかるという効率や能率だけで評価される―しかし、教育とはコンピューターのソフトを作るのが目的ではないのですから、効率だけで人間を評定してほしくない。そういう意味では、権力や権威でおさえつける教師ではなくて、生徒や子どもに慕われる先生、信頼される先生であってほしいですね。

・人生を変えた先生と風土

中村 およそ教育には、知識の伝達とか文化の継承発展とか、いろいろの目的があると思う。でも私は、もっと大事なものがあのように思います。というのは、私の中学時代は「操行・丙」無期停学三回というどうにも手のつけられない生徒

でした。五年生の時に菊地安郎先生が担任になって、「お前は要注意人物だそうだが、いったい何を考えているんだ」と聞かれました。そこで私は、ある考えを述べました。そして先生は「お前は、身体もよくないそうだから、まあ暫くは学校を休んでいい。その代り、私の家に遊びに来て。こう言われました。それから十数回遊びに行きました。それが転機というか、私は全く別の人間になりました。もともとと大事なことがあるんだということに気がついたのです。菊地先生は、英語の先生で、鶴中の第二校歌を作られた方です。

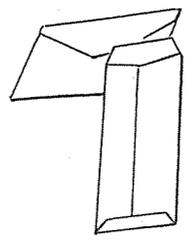
斎藤 いい話ですね。臨教審の委員の曾野綾子さんが、こんなことを言っています。「人間は本来憶病でエゴイストなものだ。教師は常にそのことを心して生徒に接していくべきだ。人間は悪いことをするけれども予想もできないすばらしいこと、いいこともするものだ。このことを、忘れてはならない」と。

先生と生徒との対応のプロセスが大事なんですね。

中村 ほんとうに、すばらしい先生やいい友人にめぐり合えたというのは、考えてみれば庄内のあの山や川…。風土に育てられたということかも知れませんが、

司会 長時間、ありがとうございました。(90年2月28日・於学士会館)

★お元気ですかー同窓生だより



(卒業順・原則として原文のまま)

三代を生きて

田中 浩

(昭和9年卒・42回)

東京鶴翔会が二十年も続けてこられたということは、歴代の会長さん、事務局長の中村信雄さんはじめ、世話役の皆さんの御骨あり、それに荘内銀行東京支店さんの一方ならぬご援助があったこそと思ひまして、感謝の気持ち一杯であります。

この機会に、大正・昭和・平成と、自分が七十二年間生きてきた世の中を振り返ってみてみたいと思ひます。

昭和九年、山形県立鶴岡中学校卒業の頃は身体強健で成績の良い生徒は、軍人の学校への進学が当然で、軍人学校進学者の多いことが学校の誇りでもあるという気風だったと思ひます。当時の日本は、ひたむきに軍

事国家への道を突き進みつつあり、国民誰もが、まさか負けるなんていうことは考へる暇もなく進んだ結果が、昭和二十年の敗戦だったわけです。

私は昭和十二年に大学を卒業、社会人となったわけですが、その頃は共産主義は危険思想という世の中ではありましたが、半面共産思想を勉強する者は、進歩的学生の如く見られる面もあったと思ひます。それが、昨年末以来の東欧の激動、最近の家元ソ連の激変がこのように急激にやってくるよとは、誰が予想し得たでしょうか。

日本はあの敗戦後四十年、今や世界の経済大国といわれる国となったわけですが、これも誰が予想し得たでしょうか。これで安泰なら「目出度し、めでたし」ですが、むしろ今や日本は、混乱の時代に入ったと言えるのではないのでしょうか。

経済は一流、政治は三流と言われる日本の90年代、そして21世紀は果してどうなるのでしょうか。政治も悪い点が多々あると思ひますが、それを許している国民の責任も当然。そしてマスコミの責任も誠に大きいと思ひます。良い国「日本」になっ

てほしいと誰しもが願っておると思ひますが、その基本は次代を担う者の教育の問題だと、私は思ひます。

中学生の頃

伊藤 啓五郎

(昭和9年卒・42回)

私が鶴岡中学校に通学した頃は、満州事変や、五・一五事件などの歴史的な事件が相次いで起こり、今にして思へば、昭和史の曲り角にさしかかった時期であった。

市内では、大陸の戦況を伝える号外の鈴の音が鳴ったり、時には、戦勝祝いの提灯行列に狩りだされ、軍歌を高吟しながら大通りを練り歩いたりした。

然し、私達中学生は、このような、慌しい世相を背景にしなからず、先ずは、平穏な日常を送り、落着いて、勉学に親しむことができた。

校内の雰囲気ものんびりしていて、佐藤義三郎先生の英語の時間に、時事問題を議論したり、秋晴れの日に、相馬繁治教頭にお願ひして、全校生徒が授業を返上して、郊外散歩を楽しんだりもした。

次に、二、三の先生についてのエピソードを述べてみたい。博物の斎藤宗雄先生は、教え子から「ムネオチャ」と呼ばれ、親しまれていた。

授業は、階段教室で行われたが、その最上段に座っていた私がある時、隣りの者と私語を交したところを、先生に感づかれた。

先生は、突如、議義を中断され、沈黙のまま、私の方を睨みつけられた。その間、一・二分、冷汗三斗の思いであった。

凶画と歴史を担当された地主 佛助先生は、口数少ない、温厚な人であった。

ある冬の日、先生は、いつものように、教壇に立たれたが、立ったまま、ひとこともしゃべらないで、両眼から、ポロポロ、涙を流され、やがて、スーッと教室から出て行かれた。私達は、あつけにとられ、ガヤガヤ、騒ぎ出した。

そのうち、教壇の前にあるストープの煙突に誰かが河豚の絵を、白墨でいたずら書きしてあり、それが先生の目にとまったのが原因とわかった。(因に先生のあだ名は河豚)。

私は、クラスを代表して、慌てて、先生の後を追ひ、職員室で、先生にお詫びして、教室にお戻りになるよう懇願したが、先生は、無言のまま、動かれようとしなかった。

私事、思い出片々

菱谷 清

(昭和13年卒・47回)

私のクラスは昨年卒業五十周年を迎え、地元幹事の心温るお世話により、記念同期会を羽黒山麓で開催し、再会を喜び、一夜懐旧談に花を咲かせました。

一二九名中既に五一名が鬼籍に入ったことを知り、その中心を許し合った親友五名(渡辺・小松・菅原・本間・市原)が含まれており、胸が痛みました。現存の三井・加藤・高橋君と共に、最も純粋で多感な時代。共に夢を語り、人生を語り、時には文学?を論じ、受験を励し合い、又時には共通の尊敬する思

定められた人生ぎりぎりまで元気で飲めて、遊びもある充実した余生を過ごしたいものだと願っています。

(株式会社・アイビエス)

日中友好人民盃(たらい)

千葉県教育交流

訪中団報告記より



渡部 洋

(昭和36年卒・68回)

「我要 理髮」「ウォヤオリ ファ」。

私は、通訳の馬さんに習ったこの言葉を繰り返し叫んだ。

「通じた?」ようだ。ここは中国南京市のホテル近くの理髮店の戸口。若い白衣の男に中へと招き入れられた。

母親と小学4年くらいの男子、2人の先客が終るのを待つ間、料金表を見ると「全種類男6元、女8元(1元40円)」とあった。馬さんは「中国人1・2元、外国人少し高い」と言っていた。

私の番になった。何を聞かれても解らないので、まな板の鯉の心境で全て一任。散髪は総ハサミです。洗髪もリンスとヘアトニックは無か

ったものの了。

いよいよ髭剃り。やや熱めの蒸したタオル。日本では最も気持ちの良い一時である。

アレレレ……。

白衣のお見さん。生暖いタオルで、私の顔をこしこし強めにこすり始めた。何回も何回も。

しかもそのタオルは先ほどの奥さんを拭き、鏡の前に置かれた大きな金盥の親子に使ったと同じ湯に浸してあった一物である。

「ヒエッ!」。正にこりや「日中友好人民タライ」だ。さらに、また驚いた。

石鹸をつけずに、バックスキンで研いだカミソリで、サーサーと髭を剃り始めた。

「ヒエッ!ノ救ってくれ!!」。でも、不思議なことに、切れ味が鈍るとバックスキンを繰り返す、終るとクリームもつけないのにとても爽やか。見事な技術?に今度は感心。ドライヤーによる整髪で終了。

所要時間30分。「謝々」の声に送られて貴重な体験もジ・エンド。

翌日……。案内役の方さんと馬さんの2人の女性、「虎 虎」と指さして大笑い。三年前の秋のこと。(千葉県農林部畜産課)

「南校入学後の三〇年」

寒河江 孝 充

(昭和38年卒・70回)

昭和35年南校入学の我々70回生は、人生舞台でいえば、丁度その佳境に入ったところと言つてよい。社会でも又家庭でも責任の重さが、どつしりと肩にのしかかっている。

ところで我期は数年前から、東京鶴翔同窓会とは別に同期会を開くこととしている。そして既ね一年一回毎にクラスの輪番で幹事をやっていたいでいる。

一次会の会場は、そのつどまぢまちだが、二次会はソニービル裏の大松屋に行くことが決まっている。皆飲むほどに酔うほどに、年代がタイムスリップして30年前のクラス仲間との意識が呼び戻されてくるのである。

ところで私事であるが、私は弁護士業は本業としてちゃんとやっているが、片手間に「知的所有権」の本を書いたり、会社法務部社員研修用のビデオの監修をしてみたり、結構楽しみなから、社会のため、いささかなりとも貢献できるものと念じて、奉仕的活動を引き受けている。

年一回の東京鶴翔同窓会、同期会以外に、クラス仲間と会うことは、互いに忙しく立廻つて

いることもあり、ほとんどできない。しかし、ともかく仲間皆がそれぞれの世界で精一杯社会のため、家族のために働いているに違いないので、互いに健康で頑張るように日々祈っている。

70回生は地主忠夫君が事務局長として、クラス会などの世話を統括してくれているので助かっている。今年は三月二〇日に同期会をやり、多くの仲間が集まり、生きることとは何かとか、50歳に近くなった私どもは、庄内のことから始まって、世界のこと迄論じ合つたのである。

行方不明からの帰国

我孫子 和 夫

(昭和40年卒・72回)

鶴南を卒業してから約25年になりますが、長い間「行方不明」になっていたようで、最近ようやく同窓会の案内や、寄付金依頼の通知をいただくようになりました。

現在は米国ニューヨークに本社のあるAP通信社の東京支局で仕事をしています。フォト・エディター、記者を経て現職の支局長となり、主に業務を担当しています。

立教大学卒業後、いわば通常の卒業―就職のコースからドロ

ップアウト。暫くして米国に渡つた後「行方不明」となった訳ですが、その期間の大半はハウスキーパー等のアルバイトをしながら、南カリフォルニアの風土にそれほど場違いには見えないういポンコツ車を下駄がわりとし懲りもせず、また彼の地の州立大学に通っていました。

日本の大学と違い随分と尻を叩かれ、勉強させられたような気がします。幸い学術的にも経済的にも大きな破綻をきたすことなく、無事ジャーナリズムの第二学位とマスコミュニケーションの修士号を取得することができ、一九七八年暮れに帰国。以来AP通信社に身を置いています。

北海道富良野でのワールドカップ・スキー大会、福岡県大牟田市の炭坑事故、新潟三区における田中角栄元首相のロッキード裁判―審判判決後の選挙キャンペーン等の取材をしたこともありましたが、最近では職種がら、記事を書く機会が殆ど無くなりました。しかし支局で、東欧の民主化、ソ連のペレストロイカや民族紛争等の、今世界中が注目しているニュースが刻々と入電されてくるのを目にするたびに、またウズウズして今日この頃です。

(久しく会ってない友へ) お元気ですか★

★お元気ですがー同窓生だより

との挨拶はこんな会話から始まる。

三・四十代の頃は、仕事趣味子供の教育、ゴルフ(そして少女性のこと)の話で終始したが、五十路にもなると、健康・コレストロール・毛髪など身体

幼児性の嗜好がぬけきれぬのは老人になったからだという友自身も、大山の本長の粕漬けで朝飯を食べてるとか。

在京の同期の新年会も毎回出席四十名前後盛会だ。有志の、「ダダチャ豆めぐる会」また昭和四十七年に始まった同期だけのゴルフコンペも、今春まで五十一回も続いておる。

それも毎回四組以上のコンペ。当初は若さもあり、技や飛ばしを競いあったが、近年は順位より「口ゴルフ」枯れた技の披露

そしてパーティーが楽しく、それだけに参加する友もいる。こんな集りによほどの公私の用があっても断わり、このコンペを最優先、お互いに窓際族と

言いながらも参加し続けている。勤め先の同僚やカミさんに、冷やかな目で批判されるのも覚悟で出てくる。素晴らしき生涯

の同期の友人は、私のかけがえのない財産だ。二人の子供達にも、在学中に生涯の友となるべき人との出会いをいつも持てと話してる。

「山河の姿うるわしく北海波濤雄偉なり」校歌の一章節。故郷への車窓より鳥海山と日本海が見える風景も、もう一つの私の財産だ。

高校二年の冬(昭和27年)校舎が火災にあい、意気銷沈している時、故菅原辰吉先生が「鳥海山を見よ」と絶叫の訓示が、あの火事の炎の色とともに忘れられない。(理工事務機株式会社)

時流れて

鷗南会G.C.のこと

飯塚 進

(昭和30年卒・62回)

昨年(昭和30年)の11月、第50回鷗南会G.C.記念ネームプレートを戴いて大変嬉しかった。鷗のマークが入った素晴らしい記念品だったからである。

鷗南会G.C.も、はや五十回を迎えた。あらためてふり返ると激流にも等しい時の速さをしみじみと感じる。鷗南会G.C.は東京近郊に住む62回生のゴルフ仲間

で構成されているが、我が仲間には第一回大会から一度も欠席せず、オール出場をはたしているツワモノがいる。

第一回大会は昭和47年のことであつた。広島東洋カープの衣笠選手は連続出場記録を更新したが、話によると指の骨折でも出場していたらしい。連続出場の記録の陰には、たいていなんらかの障害を乗り越えなければならなかった努力が潜んでいるものだ。

ここで彼の名前を紹介しておきたい。その人は、稲泉君と言う。それから、ほんの一馬身差で芳賀君がいる。

その他、20数名のメンバーは「きつつなれにしつ、ま」よりも鷗南会が好きだといつて、よく出場してくれる。つまりは、鷗南会のメンバーは、雨ニモマケズ、風ニモマケない人々なのである。

ゴルフの他にも楽しい集りがある。毎年恒例の「ダダチャ豆を食う会」や「タラ汁会」がランということだったが、野球部はいつ頃まで活動したのだろうか。

助教のO中尉。雨の教練の時間に、体験されたノモハンでの日本軍の劣勢に言及された。何か、もつと語りたかつたようである。

Y先生は公民の時間に、教科書の脚注にあつた天皇機関説の説明をされた。戦中のこと故、学問について、半ば不安をもつて謹聴した記憶が残っている。時間割に「作業」という時間がはいつた。担当はK先生、黒板に書く内容は最初の文字だけよく聞いていないと、ノートがとれない。

作業といえは夏休みの大半をつぶしてのグラウンドの整地は辛かつた。S校長のお考えときいたが、この他に級名を易経からとつた元亨利貞に改められた。また修学旅行で高野山の宿場に泊れたのは、先生のお蔭ときいてはいる。

修学旅行はゲートル着用、背嚢に米持参。最終日は東京の毎日プラネタリウム。星空の下で眠りこんだ私の眼前に、担任のF先生の笑顔があつた。カメ先生の笑い顔は、この時が最初で最後である。今の高校生は殆んど綽名をつ

れである。こんな時は、いつでもあの懐しい高校時代にさかのぼることができる。利害関係やつまらぬ牽制をせずともいい、いわば我々サラリーマンのオアシスなのである。まもなく来る次の大会が本当に待ち遠しい。

健康願望

小花 吉彦

(昭和32年卒・64回)

スタートする頃から冷たいものがポツリポツリと落ちはじめ、やがて本格的な雨となり、寒い中での恒例の「鷗友会」ゴルフコンペが開かれたのは、昨年の秋、十月十九日のことでした。防寒の準備もおろそかだった私は、スコアーはどうでもいい、早く風呂に入り暖まりたい一心でした。

そんな状況のなか、36回卒の大先輩海老名五郎さん(80才)が「なんだこれしきの雨」と論すがごとく、お元気でホールアウトしてきました。「鷗友会」には、高齢の諸先輩方が数多く参加され、その元氣なお姿を見てみると、何かほのほのと心暖まる思いがし、私もかくありたいと願わずにいられ

ません。というのも、昨年同期の菅原三弥君、渡部正巳君、村木忠弘君と三人もあいついで他界されてしまったからです。友達と会っても健康についての話題が多くなってきました。それには、酒は控え、好きなスポーツで体力造りと、はじめは、チビリチビリ酒を酌み交すのですが、そのうち自然と庄内のことになり、「この前送ってきた寒鰯うめけのう」、「白山のダダチャ食いのう」と、といいつつ酒のピッチもあがり行きつくところまで行かないと収まらなくなりました。あげくの果て、翌日は二日酔いで頭をかかえる事もしばしば。

わずか三年間の横の繋がりも、なにかと理由をつけては酒をのみ、ストレス解消に励んでいる今日この頃です。同期の連中と隅のほうで、遠慮がちに、初めて鷗翔同窓会に参加したのが十数年前のこと。以来、ほとんど欠かさず出席してきたのは何のためか、ふるさとの話題、ふるさとの酒のなせるわざなのか。それにしても、欠かさず出席されている高齢の諸先輩を見てみると羨ましい限りです。

職務通信から戦局挽回は不可能と感じ、生死の予想もつかぬ時期だけに庄内への郷愁は強かつた。此の時の司令長官、寺岡謹平中将が羽黒出身の先輩である事は間もなく知つたが、小説が置かれた趣旨は、聞く事を得なかつた。藤沢周平さんの時代小説の背景によく登場する鶴岡や庄内の描写が、子供の頃からの想い出をよく刺戟してくれる。名前を変えた城下町に鶴ヶ岡の再現があり、方言ではないが庄内の人物が動いているようである。一人の山伏と庶民の係り合いを芯に人間模様を書いた「春秋山伏記」では完全に近い庄内方言と自然描写があり、なつかしく読んだ。「川向うには平地をはさんで母狩山、湯ノ沢岳、三方倉山、摩耶山とつづく山系があつた……」と言うふうには書かれていて、見た山と聞いた山と想像の山とが、各々身近に在るように想えてくる。その頃、此等の山々の奥には人跡未踏の秘境があるようにかされてもいた。今日の変化を

(久しく合っていない友へ...) お元気ですが★

記憶のかけら

中村 賢 衛

(昭和19年卒・52回)

H先生は国語。クサメをするとか板の間仕切をこえて、公会堂中にひびき渡る。馬が嘶いたと皆が笑つた。M先生も国語。綽名はラッキョ。文法の活用より「ウチのカカアが」という言葉がでるのを楽しみにしていた。

T先生は花王石けん。雪の校門で日米開戦のニュースをせらせて下さつた。間もなく、時局班がつくられ、体操場の壁に地図をはり、日の丸をはるのが仕事。担当はO先生。野球のベテ

小説と郷愁

斎藤 平

(昭和18年卒・52回)

故郷への想を誘うものは色々あり、最近ではテレビ映像による事も増えている。ここでは小説によるそれを二題、記さしていただく。

昭和二十年五月にさかのぼる。当時私は学徒出身の少尉候補生で千葉県木更津にあつた海軍基地航空隊集団の司令部に赴任し、暗号通信の任務についたばかりであつた。食事などで出入する士官次室に数冊の小説、大林清「庄内土族」が置かれてあるのに興味をひかれた。丁度東京や横浜が連続大空襲で真赤に燃えるのが見え、基地からも迎撃機や特攻機が飛びかう最中の頃、非番の時間に借りて一気に読み終えた。戊辰の役の前後の庄内藩の困

難な情況や、敵味方の指導的人物の動きから、敗戦後の藩士多数による松ヶ岡開墾の壮舉までが物語られているのに感動した。職務通信から戦局挽回は不可能と感じ、生死の予想もつかぬ時期だけに庄内への郷愁は強かつた。此の時の司令長官、寺岡謹平中将が羽黒出身の先輩である事は間もなく知つたが、小説が置かれた趣旨は、聞く事を得なかつた。藤沢周平さんの時代小説の背景によく登場する鶴岡や庄内の描写が、子供の頃からの想い出をよく刺戟してくれる。名前を変えた城下町に鶴ヶ岡の再現があり、方言ではないが庄内の人物が動いているようである。一人の山伏と庶民の係り合いを芯に人間模様を書いた「春秋山伏記」では完全に近い庄内方言と自然描写があり、なつかしく読んだ。「川向うには平地をはさんで母狩山、湯ノ沢岳、三方倉山、摩耶山とつづく山系があつた……」と言うふうには書かれていて、見た山と聞いた山と想像の山とが、各々身近に在るように想えてくる。その頃、此等の山々の奥には人跡未踏の秘境があるようにかされてもいた。今日の変化を

★お元気ですか—同窓生だより

確めてみたい気持ちに駆られる。これからも庄内を書いていただき度いと思う。

月山のこと

藤 沢 周 平

(昭和21年卒・定時16回)

山形放送のPR誌「エリアやまがた」に、羽黒の画家今井繁三郎さんが短文をのせ、その中で村山地方で庄内側の月山を裏月山と呼ぶことに触れていた。裏月山という言葉は私もむかしに聞いたことがあり、また村山の俳人細谷鳩舎には「紫雲英田に裏月山はやや尖る」の句もあるけれども、そういうことを私はこれまで一顧もしたことがなかった。

それというのも私の記憶にある村山の月山は、前面にいろいろな山があり、形もなだらか過ぎてすっきりしなかったからである。それなのに裏月山とはおかしいなあというほどの、無意識の庄内自慢の気分もあったようだ。

ところが今回は、今井さんの文章からべつの風景が見えて来た。たとえば前山の若葉の季節か。この店は、札幌在住の庄内出身の方々が晶屑にしている由で、その筋からの入手らしい。おかみさんは広告のひとこま、ひとこまを指差しながら話題を投げかける。広告もこのように読み方をするというのの情報を入職しているものである。

年次幹事の時広告取りに苦労したことがあるが、経済的な事を抜きにしても、広告が多いことはそれなりに意義があるのではないかと思ったりする。三十年振りの札幌の夜が偶然にも「鶴翔」を肴にして飲めるとは。おかみさんの特別の応待もあつたかもしれないが、単純な私はうれしくなって飲むピッチも早まり、カウンターの本数も多くなる。初めての店であり酔ってはその自制心のあるうちに店を出たが、外に出ると急に酔いがまわり、いつしか「鳳嶺月峯雲に入り」を口ずさみながら、ヨロヨロした足どりで宿舎に向かっていた。

ああ、わが青春

鶴岡にあり

菊 地 俊 哉

(昭和28年卒・60回)

に、そのずつと奥の方にまだ純白の雪を戴く月山が朝夕見えているとしたら、それはかなり神秘的な光景と言えないだろうか。また手もとにある松坂俊夫著「やまがた文学風土誌」をめくると、田山花袋のつぎのような文章にぶつかる。「日は暮れつつある。中略私はその野の向うに、連瓦した群山の上に、丁度月が半論を空に現わしたような大きな山の姿の面白く靡いているのを眼にした。中略月山—こう私は想像した」花袋はその日最上を旅して、金山町にむかっていた。

だだちや豆の独白

中 里 欣 一

(昭和21年卒・54回)

その形においてその味においてどうしてこうまで高い次元に固定した作物ができるのであるう、とおどろくばかりで、いかなれば畑の芸術院賞ものである。酒田の故伊藤珍太郎氏は、その著「庄内の味」で白山だだちやをこう絶讃している。

だだちや豆の由来については諸説あるがそれはさておき、庄内の数あるすぐれた味覚のなかで、庄内の誇りとしてその筆頭にあげるのに異論のある人は少ないだろう。

嗜めば嗜むほどに変転する白山だだちやの味は、どこから生まれてきたのであろうか。ただ単に土壌だけを頼って今日があるのではなく、先人のたゆまぬ品種改良への努力があり、その声価も一朝に成ったものではないことを忘れてはなるまい。しかし近年、だだちや豆の味の低下を嘆く声が聞かれるのも事実である。

新潟県黒崎地区では、数年来農家の主婦が中心となって、味の良い枝豆づくりがすすめられ、

(久しく会っていない友へ) お元気ですか★

「鶴翔」を札幌の

オデン屋で読む

菅 原 良 雄

(昭和25年卒・57回)

鮮度を保つための新しい梱包材の開発とともに東京方面にさかんに出荷されている。そしてその味もいま白山だだちやに比肩するともいわれる。たしかに白山だだちやは類似品のない庄内の特産ではあるが、その王座も永久不変ではあるまい。思えば私たちが育くみ今なお望郷の思いをかきたててやまない多くの庄内の味、それは時代とともに変質し、失なわれたものも少なくはない。たかが食べ物というなかれ、それを生み育てふるさとの最高の味とした先人の努力、その心までを忘れ去ってよいものだろうか。

三十余年の転勤生活を終え、鶴岡に転居して三年、私はいま土地のくらしにどっぷりと浸って、ビルやネオンを思い出すことさえ稀になった。

岩のりの浮かぶどんがら汁、ジュンジュンと煙をあげる鱈、谷定孟宗、民田茄子、クチボソなど四季打々の味覚は、思っただけでもだだちやが流れる。もはや私は庄内の味のとりことなり果てたようである。

理屈は不要、皆さん、喰いさござへ、鶴岡へ！ (庄内日報)

のお姿や、翠なる流れ最上川のこと、そして庄内平野の黄金と輝く稲穂の波を忘れたことがない。お山に向かつて、手を合わせ頭を垂れた少年時代のその心をいまでも持ち続けている。集いも終わり、東京に戻る列車のこと、日本海を右手に、いま庄内平野と別れなければならぬのだぞと、自分に言い聞かせたとき、私のほほを冷いものが流れていた。その地に三年間机を並べて学び合った私が、最上川の白糸の滝の美しさにたとえる私の永久なる人が住んでいるのだ。

五十五歳となったいま、人生航路の第四コーナーに入ったことは確かなことだ。叡智の殿堂鶴岡南校よ、いつ迄もいつ迄もそうであれと祈りつつ、私は残された人生の毎日をこう雄叫びしながら生きることであろう。

「ああ、わが青春 鶴岡にあり」と。(厚生省勤務・山岳修験学会会員)

庄内訛り

奥 山 綾

(昭和30年卒・62回)

母校を卒業して今年で丁度三十五年の歳月が流れた。その間

現でもあると、さ大袈裟に独り悦に入っている。先輩を含む我々の年代の多くは戦後それぞれの立場、境遇の中で懸命に働き且生活し、ひいてはそれが現在の豊かな社会を築いたことにもなるわけだが、その豊かな社会で最も欠乏している「時間」を老後を含むこれからの人生で贅沢に消費してゆきたいと望んでいる。出来ることならあと数年で第一線を退いて比較的自由な立場で仕事をし少なくとも一年の三分の一は海外で生活し、日本とはまた異った文化風俗に接したいの密かな夢を抱いている。それを応えるべくせつせとその準備を進めている次第である。その時は臆することなく、庄内訛りの日本語と片言のプロークン英語とを使うほかはないと思っている。

私の財産

奥 田 文 夫

(昭和30年卒・62回)

「この前貰った薬、効かねえぞ」俺には効き過ぎる程だ。だがのお」なんの薬かわからな